

プレースメント・テスト 文字問題に関する一考察

酒井たか子

要 旨

プレースメントテスト第4版の文字問題の結果の報告および考察を行った。漢字圏（中国語圏および韓国語圏）、非漢字圏によって持っている問題が異なるため、2群ないし3群に分けて分析を行った。また、第4版から採用したマークシートの採点方式では、記述式の漢字の読み書きに代わって選択式の形式が使えることが分かった。さらに、漢字クラスのクラスワークにおける評価から、テストの妥当性を考察し、最後に文字問題がプレースメント・テストの中で占める位置と、下位テストの見直しについても言及した。

〔キーワード〕 プレースメント・テスト 文字問題 漢字圏と非漢字圏

はじめに

筑波大学留学生教育センターでは、各学期開始時にプレースメント・テストを、毎年4月と10月の新学期開始時に実施し、クラス分けの基準としてきた。これまで3期ごとに新しくテストを作成し、1990年4月期からは第4版を使用している。これまでのプレースメント・テストに関しては、三枝（1988,1989）酒井（1988,1989）に異なる視点からの報告がある。

本稿では、第4版プレースメント・テストの中の文字問題に焦点をあて、その結果の分析を行う。文字問題は、漢字圏と非漢字圏で持つ問題が異なっているため、漢字圏と非漢字圏からの検討も加える。なお、漢字圏は、中国語系と、韓国語系に分けて扱う。

外国人の日本語学習者に日本語の中で何が難しいかと問うと、「漢字」という答えが最も多く返ってくる。具体的な困難点として、以下の理由があげられる。

非漢字圏の場合

- ①一つの字に読み方が多い
- ②字形に細かい規則が多い
- ③同音の字が多い
- ④同じような形の字が多い
- ⑤読み方に例外が多い
- ⑥字数が多い

漢字圏の場合

- ①一つの字に読み方が多い

- ②同音の字が多い
- ③読み方に例外が多い
- ④発音が母語と異なる
- ⑤字形が母語と異なる

文字数の少ない文化に育った学習者にとって、読んだり書いたりするのに約2000字以上の異なる文字を覚えなければならないことは、非常に負担に感じるであろう。しかし、漢字を学んでいくにしたがって「便利だ」「面白い」「美しい」という感想を述べる学生が多い。日本の大学で研究するには、漢字は必要不可欠な基本知識であるといってもよい。本稿では大学で研究するためのブレースメント・テストとしての文字問題は、どのような問題が適切であるかという点から、第4版の問題の項目分析を行った。

また、この期より受験者の増加の対策として、マークシート方式を採用している。漢字が読めるか否かは実際に読ませたり書かせたりすることが最良の方法であることは疑いないが、選択問題でもその識別が可能となれば、多人数の場合、かなりの省力化が図れる。ここでは選択問題と記述式の問題についても検討し、その可能性について考える。

ブレースメント・テストはクラス分けが目的であるので、ここでは漢字クラスを対象として、クラス活動における学生の評価を担当教師にしてもらい、テストの妥当性の検討も行った。

最後に、これまで行われていた5つの下位テストのわけ方について、文字問題を通して見直すことにする。

2. テストの内容と実施

2-1 テストの作成

文字問題の作成は、清水百合、渡辺恵子あたり、その後テスト班で、他の下位テストとの調整を行った。問題作成に関しては、(1)大学生として必要な語彙 (2)中国語との共通性の有無(共通でないものを多く入れる)を考慮した。

また、この版を使用した期より上級クラスが新たに設けられたため、成績上位者を識別することが必要になり、3版までより難しい問題を増やしている。

ブレースメント・テストの問題は、表1に示すように、5つの下位テストからなっている。語彙問題、聴解問題、文法問題、読解問題はこれまでの第1版から第3版までと同様、4肢択一ないし3肢択一問題。文字問題Aは4肢択一、文字問題Bは記述式の漢字の読み書き各10点となっている。クラス分けには、文字問題Bを除く5つのテストの総点を用いた。ただし、後述するように漢字クラスの場合は、文字問題Bも参考にしている。

内 容	得 点	選択式／記述式	時 間
語彙問題	30点	選択式	20分
聴解問題	30点	選択式	約30分
文法問題	30点	選択式	20分
読解問題	30点	選択式	40分
文字問題 A	30点	選択式	AとBで 20分
合計	150点		
文字問題 B	20点	記述式	

2-2 文字問題の内容

文字問題の例を以下にあげる。

文字問題 A

パート1 文中の（ ）の中に入る正しい表記の語彙を選ぶ問題＜1点×15問＞
ひらがなの語彙（2問） カタカナの語彙（1問） 漢字の語彙（12問）

※ 以下、*は正答を示す。

例1 彼は（ ）で、すぐおこる。

a. 短期 b. 単気 c. 単期 * d. 短気

パート2 下線の字の読み方が異なるものを選ぶ問題＜1点×10問＞

同一漢字の音の異同（例2）／異なる漢字（一字）の音の異同（例3）／熟語の音の異同（例3）

例2 a. 前日 b. 前回 c. 食前 * d. 駅前

例3 a. 時間 b. 自分 * c. 氏名 d. 事故

例4 * a. 機種 b. 貴社 c. 記者 d. 汽車

パート3 正しい読み方を選ぶ問題＜1点×10問＞

例5 教室は2階にあります。

a. きょしつ * b. きょうしつ c. きゅしつ d. きゅうしつ

文字問題 B

1 漢字の読みを書く問題＜1点×10問＞

例6 9月8日は火曜日です。(くがつようか)

2 ひらがなのことばを漢字で書く問題<1点×10問>

例7 肉をこまかく切ってください。(細かく)

2-3 実施方法

5つの下位テストごとに時間を区切り、文字問題は5番目に行った。A・Bを同時に配り制限時間は20分間とした。日本語力がきわめて低いレベルの学生は、始めの語彙問題の時点で自主的にテストを放棄している。

2-4 採点基準

文字問題Aはマークシートをシートリーダーを用いて採点を行った。

文字問題Bの「漢字の書き」については、採点基準を設け、一人の採点者が通して採点を行った。送り仮名も採点対象に入れてある。また、旧字、簡体字、俗字は認めないことにした。

2-5 受験者概要

受験者を表2-1に表す。2回の合計受験者数は284名で、そのうちの53.2%を中国語系が占め、次に韓国語系が16.5%となっている。その他は多い順にインドネシア13名、タイ、ブラジル各7名、アメリカ、アルゼンチン各6名となっている。本稿の目的が、漢字圏の学生と非漢字圏の学生とを分けることにあるので、中国語および韓国語系以外は「非漢字系」として一つのグループとしてまとめた。

表2-1 受験者の母語別人数

(数字の単位は人) 合計の欄の(%)は全体の中の占める割合

	出身国	1990年4月	1990年10月	合計 (%)
中国語系		88	63	151(53.2)
内	中国	54	53	107
訳	台湾	28	6	34
	香港	4	3	7
	マレーシア	2	1	3
韓国語系		28	19	47(16.5)
非漢字系		34	52	86(30.3)
合計		150	134	284(100.0)

3 文字問題Aの結果と考察

3-1 基本的な統計

文字問題Aの平均、標準偏差および最高点、最低点をパート別に表3-1に、母語別の結果を表3-2に示す。また、図3-1には全体、図3-2には母語別の得点分布を示す。平均点は15.6点と、問題の難易度からみると全体としては適切であった。母語別では、韓国語系が高く、中国語系がほぼ平均、非漢字系が低い得点を山にした分布を描いている。

パート別に見ると特にパート1で非漢字系が、漢字系と比べて低い。パート1の問題は、文脈に合うような漢字語彙を選ぶ問題が中心になっており、漢字系は前後の意味から類推が利く問題だと言える。パート2は4つの語の内から違う読み方の漢字を選ぶものでこれも漢字系と比べて非漢字系が低かった。パート3は漢字の読み方をひらがな表記する問題だが、5問と少ないこと、設問によって難しすぎたり易しすぎたりしたこと、中国語系と非漢字系の間に差は見られなかった。

表3-1 文字問題Aの平均と標準偏差 (点) (N=284)

	パート1	パート2	パート3	合計
満点	15	10	5	30
平均(SD)	9.0(3.3)	4.6(2.4)	1.9(1.1)	15.6(5.8)
最高	15	10	5	29
最低	0	0	0	0

表3-2 文字問題Aの母語別の平均と標準偏差 (点)

	パート1	パート2	パート3	合計
中国語系(151人)	9.8(2.5)	4.8(2.2)	1.9(1.1)	16.4(5.4)
韓国語系(47人)	11.4(2.5)	5.3(2.3)	2.4(0.9)	19.2(5.1)
非漢字系(86人)	6.5(2.8)	3.8(2.5)	1.9(1.1)	12.2(5.1)

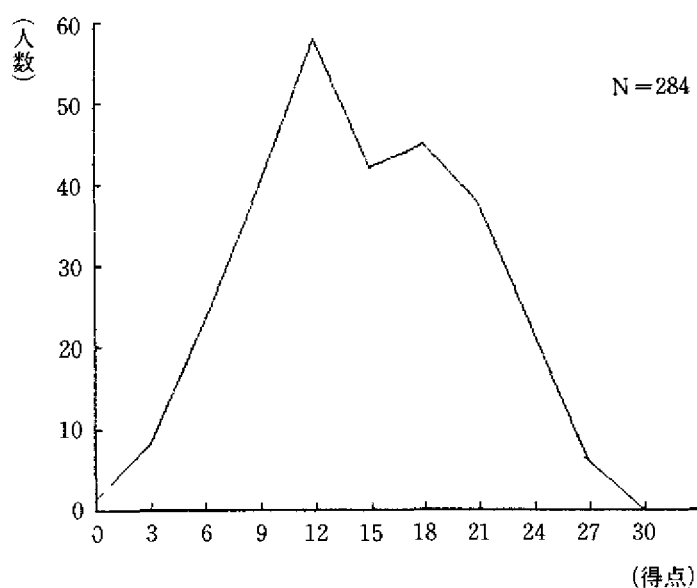


図3-1 文字問題Aのヒストグラム

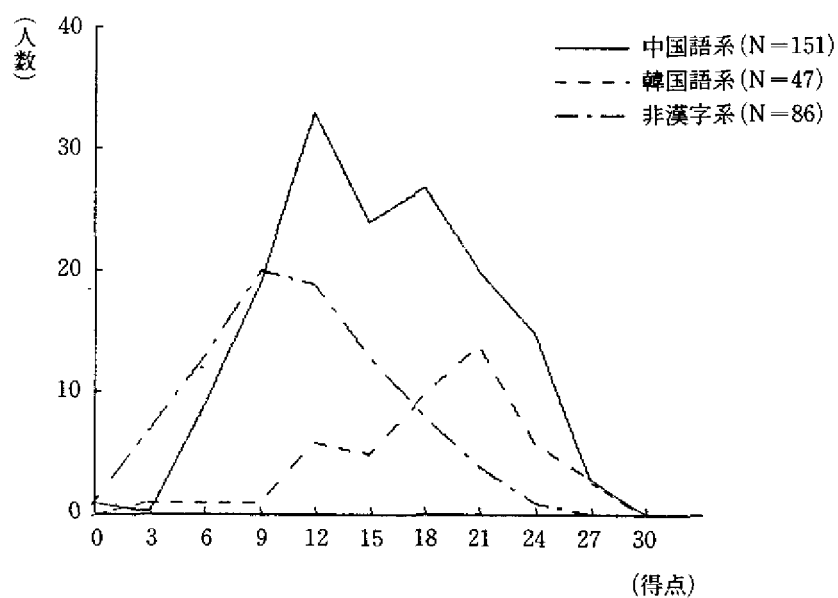


図3-2 文字問題Aの母語別ヒストグラム

パート1の問題のうち、中国語系と非漢字系の間で正答率の差の大きかった問題3問を次にあげておく。問10、問5は共に中国語系が80%以上の正答率であったのに対し、非漢字系は38%、36%と低い。問12も中国語系65%に対して、非漢字系は16%の正答率であった。前後の意味を捉えられればできる問題なので、中国語系には易しいと言えよう。ただしこれらを語彙問題とするか文字問題とするかは迷うところである。

問10 この問題については後から（ ）しましょう。

* a. 検討 b. 見討 c. 見当 d. 検当

正答率 中国語系 81%

非漢字系 38%

($\chi^2=14.03$ $p<.01$)

問5 ()め先の電話番号を教えてください。

a. 努 b. 務 * c. 勤 d. 働

正答率 中国語系 80%

非漢字系 36%

($\chi^2=14.13$, $p<.01$)

問12 ()を立て直して、あしたの試合に備えることにした。

a. 体制 b. 耐性 * c. 態勢 d. 大成

正答率 中国語系 65%

非漢字系 16%

($\chi^2=18.58$ $p<.01$)

3-2 問題の検討——項目分析(GP分析)

全受験者284名の中から、成績上位のグループ(上位群)と下位のグループ(下位群)を76名ずつ(26%)選び、その2つのグループの正答率と識別度を求めた。図3-3は、横軸に正答率、縦軸に識別度をとって30問を散布図で示したものである。30問のうち、識別度が0.20以下であったのは5問、0.30以下は2問あった。この識別度0.20以下の問題のうち正答率が0.20以下が2問、0.80以上が2問であり、難易度が識別度を下げる原因になっていた。これらの問題と正答率(DIF)と識別度(DIS)、および上位群、下位群の選択パターンを以下にあげる。

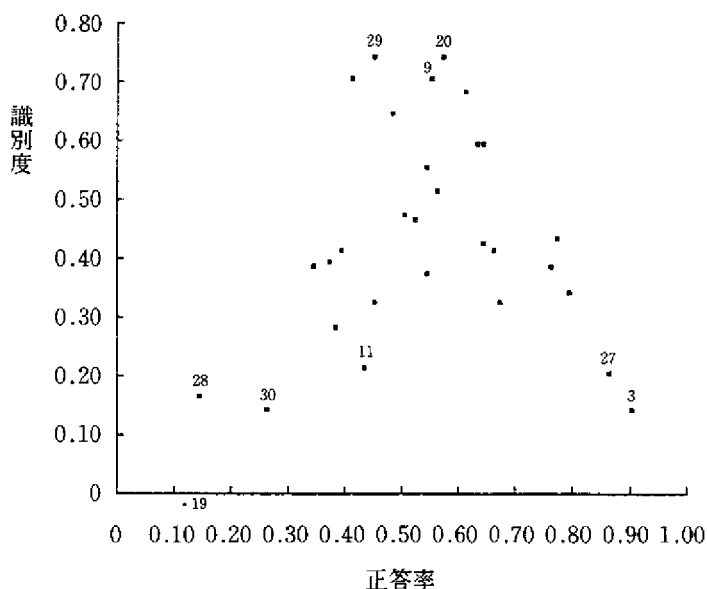


図3-3 文字問題Aの正答率と識別度

3-2-1 難易度が原因により、識別度の低い問題

問19 四つの語のうち下線の字の読み方がちがうものを選ぶ。

- a. 血筋 b. 腹筋 c. 筋金 d. 筋道 (DIF 0.12 DIS -0.03)

表3-3 問19の上位群、下位群の選択パターン

	a.血筋	*b.腹筋	c.筋金	d.筋道	無答
上位群	8	11	51	25	5
下位群	17	13	30	18	22

数字は選択した割合(%)

問19は正答率が上位群11% 下位群13%と共に低いことが原因である。上位群の誤答が「筋金」に集中している。語彙のレベルとして上位群にも高度すぎた。

問28 人気がない道を夜一人で歩くときは、気をつけてください。

- a. じんき b. にんき c. ひとけ d. じんけ (DIF 0.14 DIS 0.16)

表3-4 問28の上位群、下位群の選択パターン

	a.じんき	b.にんき	*c.ひとけ	d.じんけ	無答
上位群	11	67	22	0	0
下位群	16	62	7	7	8

数字は選択した割合（％）

問28も正答率が0.14と低いために識別度が低くなったものである。「人気」に2通りの読み方があり、文脈から考えれば「ひとけ」になるのだが、上位群にも難しすぎる設問であった。

次に易しすぎた2問の上位群と下位群別の選択パターンをあげる。

問3 （ ）でくつを買った。

a. デパート b. デパトー c. テパート d. テパトー (DIF 0.90 DIS 0.14)

表3-5 問3の上位群、下位群の選択パターン

	*a.デパート	b.デパトー	c.テパート	d.テパトー	無答
上位群	97	0	1	0	0
下位群	83	1	12	1	3

数字は選択した割合（％）

問27 ここに荷物をあずけてください。

a. にもつ b. かもつ c. にもの d. かもの (DIF 0.86 DIS 0.20)

表3-6 問27の上位群、下位群の選択パターン

	*a.にもつ	b.かもつ	c.にもの	d.かもの	無答
上位群	96	1	1	1	1
下位群	76	5	5	5	9

数字は選択した割合（％）

問3、問27は正答率がそれぞれ0.90、0.86と易しすぎた。下位群の正答率も0.83、0.76と高い。そのため識別度が低く出た問題である。

3-2-2 難易度が原因ではなく、識別度の低い問題

正答率が極端に高かったり低かったりしたわけではないのに、識別度の低かった問題としては、次の2問があげられる。（正答率が0.20以上0.80以下で、かつ識別度が0.30以下のものを対象とした。）

問11は正答率が43%と適当であるのに識別度が0.21と低かった。上位群、下位群ともに「講議」を選択している割合がそれぞれ45% 42%となっており、総合点が高いからといって正しい漢字が選択できていないということになる。母語別に「講議」を選択した割合を見ると、中国語系、韓国語系、非漢字系がそれぞれ43%、34%、42%となっており、これから考えると、母語が干渉しているわけでもない。大学生としてよく目にするであろう語彙にもかかわらず、正しい文字が定着していないことがわかる。

問11 あの先生の（ ）はとてもおもしろい。

- a. 講議 b. 講義 c. 行議 d. 行義 (DIF 0.43 DIS 0.21)

表3-7 問11の上位群、下位群の選択パターン

	a.講議	*b.講義	c.行儀	d.行義	無答
上位群	45	54	1	0	0
下位群	42	33	11	5	9

数字は選択した割合 (%)

問30は、識別度が0.14と低かった。正答率が0.26と極端ではないが低いことも原因になっている。上位群の59%が「ふとくしゅ」を選んでおり、語彙として馴染みの薄いものであったようだ。

問30 スピーチはどうも不得手なもので、申し訳ありません。

- a. ふとくしゅ b. ふとくしゅ c. ふえて d. ふえて

(DIF 0.26 DIS 0.14)

表3-8 問30の上位群、下位群の選択パターン

	a.ふとくしゅ	b.ふとくしゅ	c.ふえて	*d.ふえて	無答
上位群	1	59	5	33	2
下位群	17	34	14	18	17

数字は選択した割合 (%)

3-2-3 識別度の高かった問題

次に識別度の高かった問題はどのような問題かを示すために、各パートごとに1問ずつ取り上げる。

パート1

問9 彼のすばらしい研究には、（ ）した。

- a. 関心 b. 飲心 c. 感心 d. 観心 (DIF 0.55 DIS 0.70)

表3-9 問9 の上位群、下位群の選択パターン

	a.関心	b.歎心	*c.感心	d.観心	無答
上位群	8	3	89	0	0
下位群	33	22	20	8	17

数字は選択した割合(%)

上位群の89%が正答であるのに対し、下位群では正答の「感心」よりも「関心」「歎心」を多く選択している。「感心」「歎心」「関心」はすべて正しい語彙として存在するものであるので、文脈が分かっているか否かが問われている。難易度の点で適当な問題であった。

パート2

問20 四つの語のうち下線の字の読み方がちがうものを選ぶ。

- a. 親切 b. 季節 c. 説明 d. 設計 (DIF 0.57 DIS 0.74)

表3-10 問20の上位群、下位群の選択パターン

	a.親切	b.季節	c.説明	*d.設計	無答
上位群	3	1	1	93	2
下位群	20	29	16	20	15

数字は選択した割合(%)

熟語で「せつ」「せっ」の読み分けができるかどうかを聞いている。上位群が93%の正答率であったのに対し、下位群は20%と低く、識別度が0.74であった。下位群の解答は、4つの選択肢に分かれている。

パート3

問29 私たちは農業を使わない農場経営を試みています。

- a. しみて b. ためしめて c. こころみて d. かえりみて
(DIF 0.45 DIS 0.74)

表3-11 問29の上位群、下位群の選択パターン

	a.しみて	b.ためしめて	*c.こころみて	d.かえりみて	無答
上位群	4	13	82	1	0
下位群	42	13	8	20	9

数字は選択した割合(%)

「試」の訓読みを聞いているが、下位群では42%が音読みの「シ」である a を選択している。下位群の学生が一つの読み方しか知らないということが明らかになった問題である。正答率は、上位群では82%であるのに対し、下位群は8%であり、識別度が高い。

4 文字問題Bの結果と考察

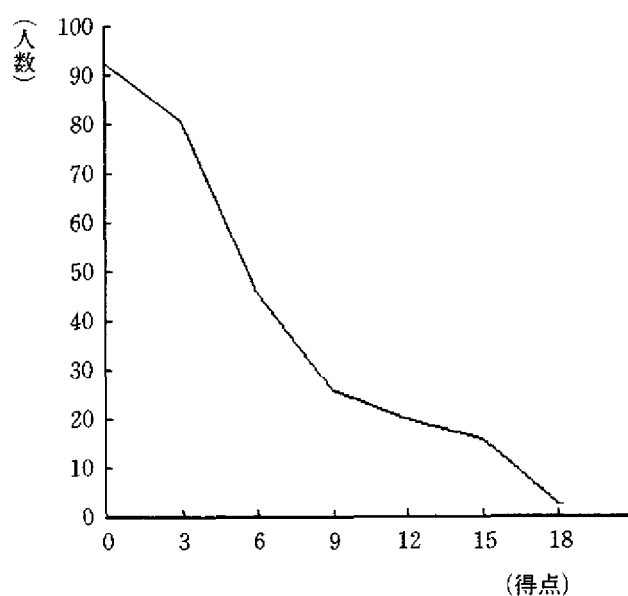
文字問題Bの平均、標準偏差などの結果を表4-1 に、母語別の結果を表4-2 に示す。また図4-1、図4-2はそれぞれ全体と母語別にヒストグラムで表したものである。平均は20点中満点で5.4点と非常に悪く、難しすぎる問題であった。文字問題のうち、記述式のテストは、得点が非常に低いところで山がひとつ現れる傾向はあったが、今回の問題Bはそれが極端になり、ヒストグラムでは山の片側だけのグラフとなって現れた。これは、先にも述べたように、上級クラス新設のため、成績上位者を識別するレベルのテストを含むことも意図した結果、難しすぎる問題が多くなってしまったからである。母語別にみると、韓国語系が一番ならかな分布になっている。非漢字系は最頻値が0点～2点の低い値になっている。中国語系は非漢字系よりはやや良かったが、最頻値は3点～5点となっている。

表4-1 文字問題Bの平均と標準偏差 (点) (N=284)

	読み	書き	合計
満点	10	10	20
平均(SD)	2.6(2.5)	2.8(2.5)	5.4(4.7)
最高	15	10	5
最低	0	0	0

表4-2 文字問題Bの母語別の平均と標準偏差

	読み	書き	合計
中国語系(151人)	2.4(2.4)	3.3(2.7)	5.8(4.9)
韓国語系(47人)	4.0(2.8)	3.5(2.2)	7.6(4.8)
非漢字系(86人)	2.0(2.0)	1.4(2.5)	3.4(3.3)



N=284

図4-1 文字問題Bのヒストグラム(合計)

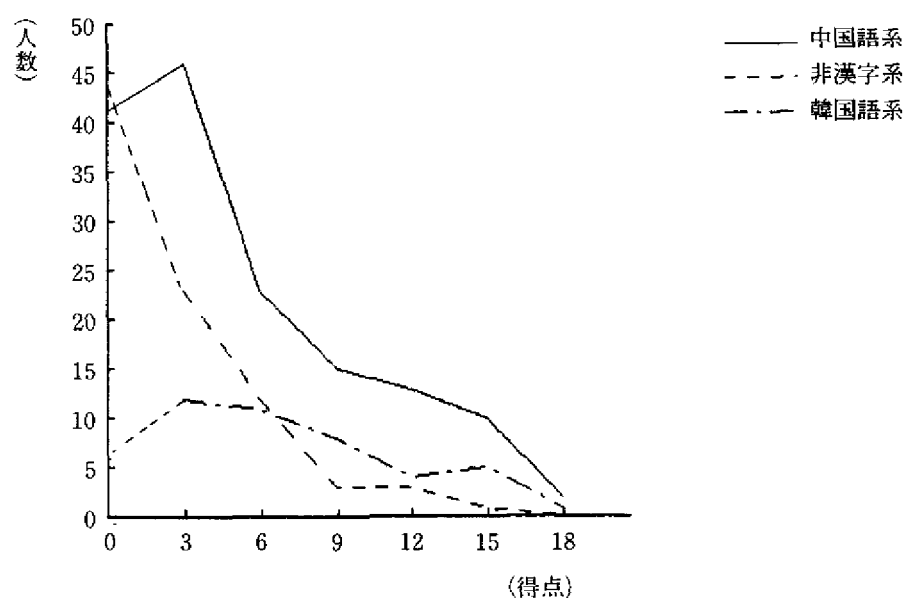


図4-2 文字問題Bの母語別ヒストグラム

漢字系と非漢字系では現れた誤りの様態が異なる。非漢字系では無答が多いが、漢字系では音が不正確であるために起こる誤りの例が多かった。例えば中国語系では、「寄付」を「切符」、「参照」を「先週」「最初」などと表記した解答が複数見られたが、この種の誤りは非漢字系には現れなかったものである。また、当然のことながら、俗字や簡体字は漢字圏にだけに見られた誤りである。漢字系でも前後の文脈を読んで正しい漢字を推測するには、語彙力および読解力と結び付いていることがわかる。以下に、正答率の順に、正答率と誤答の例をあげる。誤答の例は、原則として2例以上で現れたものである。

「読み」問題の正答率と誤答例

- 1 九時のバスに間に合った。(正答率63.7%)

誤答の例：あいだにあった／あいたにあった／かんにあった

非漢字圏では、「まにあう」という語は知っていても漢字の表記を知らない学生が多かったようだ。

- 2 東京に一泊します。(正答率46.5%)

誤答の例：いっばく／いっぼく／いっばつ／いっはく／いちとま

- 3 九月八日は火曜日です。(正答率35.6%)

誤答の例：九月 きゅうがつ／きゅうげつ／くげつ／くかつ／くけつ
／ここのがつ／はちがつ

八日 はちにち／やっか／よっか／はちか

語句のレベルとしては易しいが、3分の1しか正答していない。

- 4 「その花は何色ですか。」「赤です。」(正答率33.1%)

誤答の例：「なんいろ」が誤答のほとんどを占めた。これは、漢字系、非漢字系を問わず多く見られた。非漢字系は、この他、なんしょく／なんのいろ

語句のレベルとしては易しいが、3分の1しか正答していない。

- 5 テレビはほとんどの家庭に普及している。(正答率27.8%)

誤答の例：ふうきゅう／ほきゅう／ふっきゅう

- 6 勢いよく水が出てきた。(正答率12.7%)

誤答の例：おおぜい／おおせい／いきよい／あつい

- 7 兄は外科医です。(正答率12.0%)

誤答の例：がいかい(多数)／かいかい／がかい

- 8 日本語は主語を省くことが多い。(正答率12.0%)

誤答の例：かぶく／はばく／せい／しょうく

- 9 抽象的な話でよくわからなかった。(正答率12.0%)

誤答の例：しゅうしょうてき／じゅうしょうてき／しゅうじょうてき

- 10 秩序が保たれていない。(正答率7.0%)

誤答の例：ちつじょう／じっしょ／てつじょう／じじょう／ちつしょ

「書き」問題の誤答例

- 1 日本語がじょうずですね。(正答率80.6%)

誤答の例：上毛

- 2 日本語の勉強には辞書がひつようだ。(正答率60.7%)

誤答の例：必用／引用／需要／引つよう

- 3 AとBとは長さがひとしい。(正答率23.9%)

誤答の例：酷しい／同しい／当しい

- 4 危険がともなう。(正答率19.7%)

誤答の例：伴なう(送り仮名)／共なう／担う／件なう／友なう

- 5 後ろにかいてあるリストをさんしょうしてください。(正答率19.4%)

誤答の例：先週／最初／生産

- 6 このじょうきょうは改善しなくてはならない。(正答率17.6%)

誤答の例：状況(況は簡体字)／情況／条件／状態

- 7 肉をこまかく切ってください。(正答率16.9%)

誤答の例：細く(送り仮名)／混かく／小間切

- 8 わかりやすいめじるしをつけた。(正答率15.8%)

誤答の例：目示／目指し／名印

- 9 これはA社がきふしてくれたものです。(正答率15.1%)

誤答の例：切符／奇付／賄付／寄賦

- 10 経済の発展をうながす。(正答率11.3%)

誤答の例：仰がす／謀がす

5 文字問題Aと文字問題Bの関係

文字問題Aと文字問題Bの相関係数は0.80であった。(表5-1)図5-1に、横軸に問題A、縦軸に問題Bをプロットした散布図を示す。この結果から、文字問題で、記述式の読み書きのテストは、選択式の形式でも相当程度測定することが可能だといえる。

表5-1 文字問題Aと文字問題Bのピアソン相関係数

N=284

		文字 問題A	文字問題B		
			合 計	読 み	書 き
文字問題A		—	.	.	.
文字 問題 B	合 計	.80	—	.	.
	読 み	.75	.93	—	.
	書 き	.75	.94	.74	—

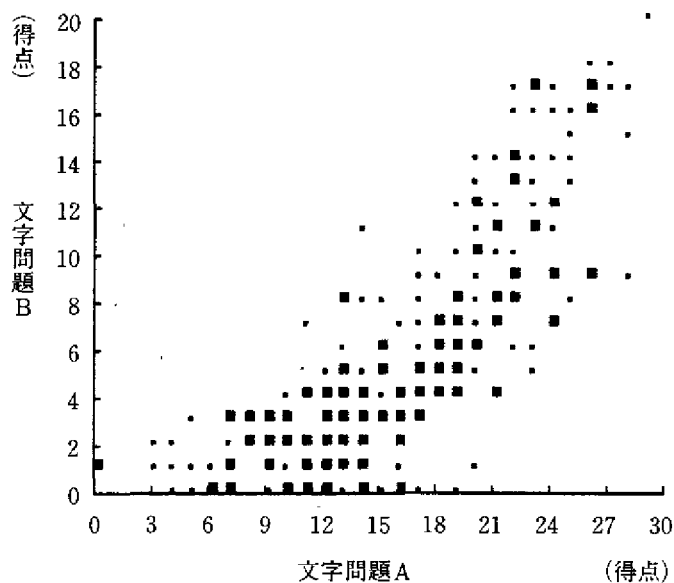


図5-1 文字問題Aと文字問題Bの相関

6 妥当性の検討

6-1 漢字クラス

ブレースメント・テストの目的はクラス分けにある。今回も従前までと同様、5つの下位テストの総合点を基準にして、前のクラスや漢字圏か非漢字圏などを加味してクラスを決定した。

漢字のクラスに関しては、初級Ⅱと中級Ⅰのレベルの学年を対象に、漢字クラスⅠ（低いレベル）、

漢字圏クラスⅡ（高いレベル）それぞれ週1コマ（75分）が開講されている。少数ながら、中級Ⅱの学生も漢字クラスに登録している。

漢字クラスのクラス分けに関しては、今回は、テストの「文字問題A」「文字問題B」の結果を参考に、学生にどちらのクラスが適当かをアドバイスする形式をとった。

表6-1 クラスの分け方

初級Ⅰ	
初級Ⅱ	漢字クラスⅠ
中級Ⅰ	
中級Ⅱ	
上級	漢字クラスⅡ

6-2 学生の日常のクラスワークとテストの結果との関係

授業がコースの約半分終わった段階で、担当の教師に学生の評価をしてもらった。担当教師の評価のしやすさにより、5段階評価と3段階評価の2通りになっている。（註1）対象は当期のブレースメントテストを受験した学生のみとした。

図6-1は漢字クラスⅠ、図6-2は漢字クラスⅡの学生の文字問題Aと合計得点の相関に教師の評価を書き入れたものである。対象となる学生が少ないが、図から以下のことが言えよう。

1. 漢字クラスⅠに関しては、合計、文字問題の得点と教師の評価との間に相関がある。
2. 漢字圏の学生の中には、テストの点が低くても、教師の評価が高い学生がある。
3. 漢字クラスⅡに関しては、合計、文字得点とも教師の評価との間に相関は見られない。

相関が、漢字クラスⅡであまり高く出ていない理由としては、担当教師によると、教師の側の評価が純粋に漢字力を反映しているというよりは、学習態度の要因なども含まれているためであるとのことであった。

ここで、テストの妥当性を考えた場合、教師の評価が外部規準となっているので、併存的妥当性を測定していることになろうが、テストの時期と、教師の評価の時期の間に約1か月半の期間があり、結果として予測的妥当性を測定したともいえる。

ただし、コースの途中から出席しなくなった学生の中に、クラスのレベルが適当ではない学生もあったと思われるが、実状をつかみにくいので本稿では触れないことにする。

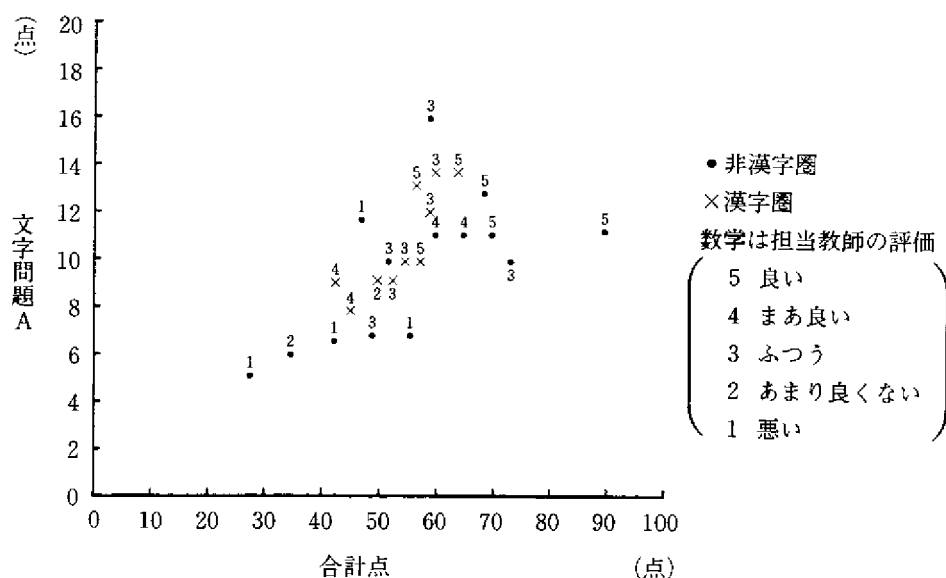


図6-1 合計点と文字問題Aの得点の散布図と担当教師の評価(漢字クラス1)

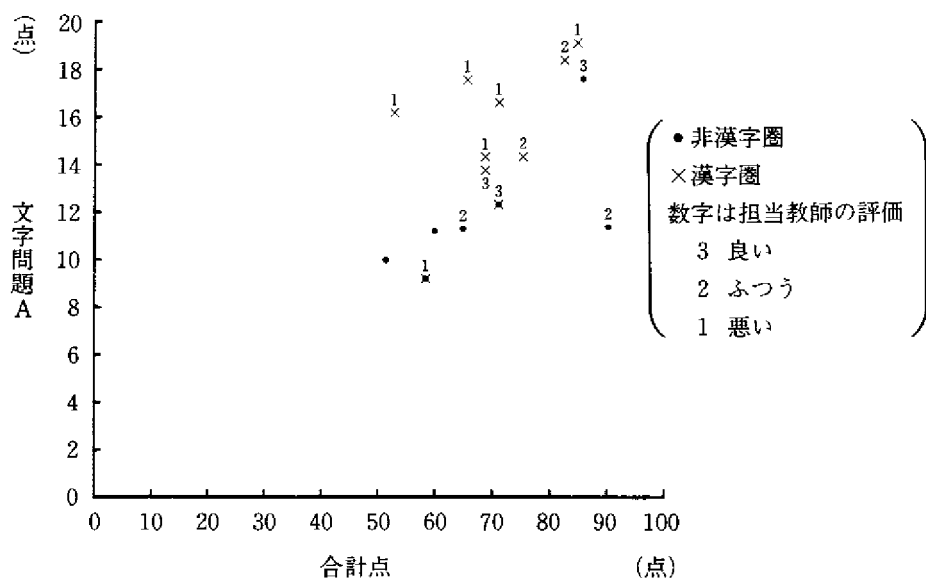


図6-2 合計点と文字問題Aの得点の散布図と担当教師の評価(漢字クラス2)

7 下位テストの見直し

本センターで用いるプレースメントテストは第1版より、語彙問題、聴解問題、文法問題、読解問題、文字問題の5つの下位テストに分けている。この5つのカテゴリーは、これで良いのだろうか。今回の文字問題を検討していると、語彙問題との分け方をどう扱うかが問題になってきている。また、文法問題と読解問題では、漢字の意味を知っているか否かが重要なポイントになっているし、聴解問題にしても同音意義語など、ある音を聞く際に漢字を思い浮かべて聞く語彙というのもあるので、漢字力もかかわってきているといえる。文字問題は他のテストの中でどのような位置にあるか、下位テスト間の関係を検討することが必要であろう。

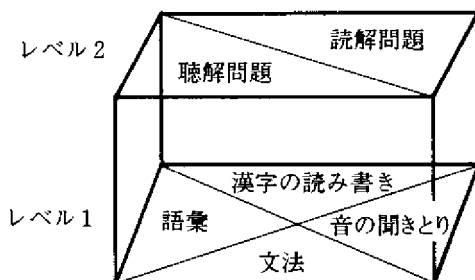
言語能力の測定には、大きく分けると部分的測定法と統合的測定法がある。部分的測定法はLado (1961) が強く主張したもので、「言語要素（音素、抑揚、強勢、形態素、語、文、節、句）を個別にテストすべきだ」というものである。この考え方は「テスト内容やサンプルを取り出すべき領域を明確に示した」という点で評価でき、到達度テストや診断テストでは役に立つ。また、統合的測定法は言語を文脈の中で理解し、使用する能力を測定するものであり、伝達能力、運用能力の測定の面で妥当性が高い。（青木 1985）

ここでプレースメント・テストを考えた場合、得られた得点がある後どのように利用されるかによって下位テストの分け方が決まってくる。

一つの可能性として、レベルを2段階に想定することを提案したい。（図7） レベル1は初級・中級の学習項目に即した「到達度テスト」として捉える。たとえば、文法は、受身、使役などの初級文法は出来ているから、中級Ⅰのクラスに入れて、中級文法からはじめればよい、といった具合に「到達基準」に基づくテストが考えられる。この場合の下位テストとしては、文法問題、語彙問題、漢字の読み書きの問題および音の聞き分けから構成される。レベル2としては、レベル1である程度の成績をとった学生を対象に、総合力を問う聴解問題、読解問題から構成される。

2段階に分けることにより、低いレベルには負担が減り、かつ後のクラスワークで必要となる基礎的な資料が得られ、高いレベルには総合力を適格に判断しやすくなるという利点がある。

図7 下位テストの構成案



8 今後の課題

1 近年ワープロの普及はめざましく、学会の報告の資料、レポート、ゼミの資料なども、相当程度ワープロが用いられており、必要不可欠なものとなってきた。ワープロの使用により、漢字に対する取り組み方が変わってきている。たとえば、これまで手書きで漢字を書いていたのに対して、ワープロを使う時には、1.正しいひらがな表記ができる。2.正しい漢字が選択できる。ことが必要である。

1.は漢字圏、非漢字圏に共通して難しい。濁音／清音、長音／短音、促音などを、間違えて覚えていたため、ワープロで入力する際に漢字に変換できず、初めて間違いに気付くケースがよくある。

2.は、「漢字の再生」がワープロでは「漢字の再認」の問題に代わる。特に非漢字圏で、漢字の細かな規則や画数などでかなり負担が減るだろうと考えられる。

今後、さらにワープロ使用が進むであろうがその場合を考えると、文字問題では、これに対応した漢字力の測定を考えなければならない。記述式ではなく、正しいひらがな表記と同音異義語の選択がより重要になってくる。

2 前節で考えた下位テストの見直しは、得た得点をどう利用するかで変わってくる。そこにはクラスの在り方とも大きく関わっている。漢字のクラスと同じように聴解クラス、読解クラスをレベル別に用意することも一案であろう。

註1 漢字クラスⅠは渡辺恵子、漢字クラスⅡは阿久津智が担当している。

参考文献

- 青木昭六編（1985）『英語の評価論』大修館書店
- 石田敏子他（1985）『外国人学習者の日本語学力構造の解明』（文部省科学研究費補助金 研究成果報告書）
- 大友賢二（1987）「英語テスト項目分析におけるエントロピーの利用」『外国語教育論集』9号 筑波大学外国語センター
- 三枝令子（1986）「ブレースメント・テストの統計的処理の試み」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』第2号
- 三枝令子（1987）「ブレースメント・テストの妥当性の今後の展望」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第3号
- 酒井たか子（1986）「ブレースメント・テスト複数回受験者の得点推移と習得タイプ」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』第2号
- 酒井たか子（1988）「ブレースメント・テスト母語群別分析」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第4号
- 日本語教育学会認定委員会（編）（1991）「日本語テストハンドブック」大修館書店